

琉球大学学術リポジトリ

中学校家庭科における染め織り教育の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2016-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 由香, 長田, 真理子, Matsumoto, Yuka, Nagata, Mariko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35072

中学校家庭科における染め織り教育の可能性

松本由香・長田真理子

Potentials of Using Dyeing and Weaving Materials for Improving Junior High School's Home Economics

MATSUMOTO, Yuka and NAGATA, Mariko

I 研究目的と研究方法

1. 研究目的

沖縄県には、経済産業大臣が指定する伝統的工芸品 14 品目のうち、染め織りが 12 品目存在し、染め織りは現在も沖縄の各地で行われている。しかし実際に染め織りの産地を訪ねて現状について聞き取りを行うと、生産者は高齢化、減少傾向にあり、染め織りの継承が喫緊の課題となっていることがわかる。一方で沖縄の人々の日常生活をみると、染め織りの存在は薄く、それを継承していくとする若者の意識も低いように思われる。

そこでまず沖縄の染め織りに関する教育が、どのように行われてきたのかをみてみたい。沖縄県の教育指針では、「沖縄独自の歴史、伝統、文化を継承し、沖縄に誇りをもった人間を家庭・地域と連携して育てる」方向性が示され、このことは、沖縄県の基本構想「沖縄 21 世紀ビジョン」の将来像としても示されている。そういう中で、地域の文化が教育で初めて取り上げられる小学校教育、またそれに次ぐ中学校教育における家庭科の地域教材をみると、食生活領域での郷土料理や各地特産の食品を用いた調理が多く取り上げられ、住生活領域でも沖縄の気候・風土をふまえた伝統的な住居の工夫が必ず取り上げられているといえる。

しかし衣生活領域では、地域教材を授業に取り上げた例は、ほとんどみられないといってよい。沖縄県の中学校家庭科での授業実践について研究した喜屋武 [2004] によれば、1993～2002 年の

調査期間内に、地域を教材とした衣生活に関する授業は、豊見市のウージ染め 1 件のみである。これに関連して、福原・伊波 [2008:120-130] は、沖縄県中学校技術・家庭科研究会（島尻地区被服領域研究部会）で 1993 年に行われた「被服学習を意欲的に取り組ませるための望ましい題材の選定と教具の効果的な活用—手芸品の製作の中でウージ染めを活かした小物作り—」において、「自身の生活を見つめ、子ども自身の生活課題に気づく視点」、「地域や社会を見つめ、そこで生活課題に気づく視点」、「地域を変える視点」が取り入れられておらず、その点が課題であると指摘している。福原・伊波 [2008:132] は、その理由として、染め織りが子どもたちの生活にとって「非日常」であるからと考えていて、家庭科ではさらに、染め織りが、子どもの現在の衣生活と密着するような授業展開が必要であると指摘している。つまり沖縄の各地でかつてから盛んに行われている染め織りを、子どもたちが身近に感じられる授業を行うことが、地域課題の解決につながると言い換えることができよう。

そこで本研究では、中学校家庭科衣生活領域の授業で、教材として用いることのできるパワーポイント教材を製作する。

2. 研究方法

本研究は、次のように行った。

(1) 2013～2014 年にかけて、全国の学校におけ

る伝統教育、地域教材に関する文献・資料収集を行った。また中学校技術・家庭科学習指導要領、家庭科教科書における衣生活領域での伝統教育、地域教材の取り扱いについて調査を行った（Ⅰ）。（2）2013～2014年にかけて、沖縄県の染め織りに関する文献・資料収集を行い、沖縄県内でどのような染め織りが行われているか、染め織りの歴史と現状、生産地、生産方法、素材や染め織り、柄の特徴についてまとめた。それらのまとめには、筆者らが、沖縄県各地で染め織りにたずさわる人々や組合を訪ね、染め織りの現状、生産の特徴、学校教育との関わりについて聞き取りを行い、訪問したいくつかの組合で織り体験を行った結果の考察を含めた（Ⅱ）。筆者（長田）は聞き取りを、次の9種類の染め織りを対象に行った。

- ① 芭蕉布（喜如嘉芭蕉布事業協同組合、大宜味村喜如嘉）
- ② 読谷山花織・読谷山ミンサー（読谷山花織事業協同組合、読谷村）
- ③ 知花花織（知花花織事業協同組合、沖縄市）
- ④ 琉球絣（琉球絣事業協同組合、南風原町）
- ⑤ 琉球びんがた（城間びんがた工房、屋富祖びんがた工房、那覇市）
- ⑥ 首里織（那覇市伝統織物事業協同組合、那覇市）
- ⑦ うらそえ織（うらそえ織結の会、浦添市）
- ⑧ ウージ染め（ウージ染め事業協同組合、豊見城市）
- ⑨ 八重山 upp（新垣幸子工房、石垣島）

そして次の4種類の染め織りについては、筆者（松本）が2013年度に行った調査で得た資料と文献から考察をまとめた。

- ⑩ 八重山ミンサー（竹富織物事業協同組合、竹富町）
- ⑪ 宮古 upp（宮古織物事業協同組合、宮古島市）
- ⑫ 久米島紬（久米島紬事業協同組合、久米島町）
- ⑬ 与那国織（与那国町伝統織物協同組合、与那国町）

（3）2013～2014年にかけて、沖縄県内の小学校150校・中学校100校を対象に、染め織り教育の現状、その教育への教師の意識についてのアンケート調査を行った。その結果から、染め織り教育の現状をまとめ、今後の課題について考察した（Ⅲ）。

（4）以上（1）～（3）をふまえ、沖縄県の染め織りについてのパワーポイント教材を作成し、染め織りの授業実践を提案した（Ⅳ）。

II 沖縄の染め織りの現状と課題

現在行われている沖縄の13の産地の染め織りについてまとめ、現状をふまえた課題について考察する。

1. 伝統を守る織り：芭蕉布（大宜味村喜如嘉）

芭蕉布は、古くから広く、身分、性別、年齢の区別なく着用されてきた〔吉田 2002:65〕。かつて奄美大島から与那国島まで広範な地域で織られていて、沖縄本島では、特に首里、今帰仁、大宜味で盛んに織られていた。しかし沖縄戦で多くの織手が失われ、洋服の着用への移行が、芭蕉布の衰退をうながした。

沖縄戦後、喜如嘉で芭蕉布の再興に尽力したのが平良敏子氏である。芭蕉布は、1972年に沖縄県の無形文化財に、1974年には国の重要無形文化財に、1988年には、通商産業大臣により伝統的工芸品に指定された。また平良氏自身も、2000年に芭蕉布の技術保持者、いわゆる人間国宝に認定され、芭蕉布は、国や県によって公的に保存の対象とされた。

喜如嘉の芭蕉布づくりは、原料の栽培から織りまでを、分業ではなく、織り手が一貫して行っている。原料の芭蕉布は、繊維を採れるようになるまでに3年かかるが、原料を地元で栽培し、織りまでを行う織物は、宮古 uppと喜如嘉の芭蕉布のみである。古くから生活の一部であった布づくりの技法を受け継ぎ、時間と労力をかけて織り上げられてきた。

芭蕉布づくりと学校教育との関わりについて、辺土名高等学校環境科では、地元の芭蕉布づくりの教育が行われ、また奥間小学校では、獅子舞の毛を芭蕉から採る実習が行われているという。しかしこの2校以外、芭蕉布づくりを教育に取り入れている学校は確認できなかった。暑い季節を涼しく過ごす衣服に適した芭蕉布が、古くから沖縄の人々によって着用され続けてきたことを考える

ことは、地元の伝統文化を知り、衣服の役割を考える上で有意義であるといえよう。

2. 伝統文化の再認識：読谷山花織・読谷山ミンサー（読谷村）

読谷山花織は、15～16世紀頃、南蛮貿易で栄えていた読谷山に、タイ、ミャンマー、ジャワなどの南方から染織布や技術がもたらされてつくられるようになったと考えられている〔吉田2002:74〕。その後、読谷山按司の護佐丸によって家内工業化され、琉球王府の御用布として生産されてきた。沖縄戦後、花織は、婦人会によって、その後、与那嶺貞によって、地機ではなく、高機で織られるようになった〔沖縄県商工労働部商工振興課 2012:47〕。そして「読谷山花織」の名称が用いられるようになった。1975年には沖縄県の無形文化財に、1976年には伝統的工芸品として、通商産業大臣の指定を受けた。また1999年には国の重要無形文化財に指定され、与那嶺貞氏がその技術保持者、いわゆる人間国宝に認定された。

筆者（長田）は、2014年11月に読谷山花織事業協同組合で織り体験を行った。そこでは、竹串で経糸をすくって模様をつくる「グーシ花織」の技法でコースターを織った。模様は、裕福になれるようにといふ「シンバナ」、子孫繁栄を願う「オージバナ」、長寿を願う「カジマヤーバナ」の3種類があり、これら3種類を織り手が自由に組み合わせることで、30種類以上の幾何学模様を織ることができるという。一見むずかしそうであるが、一度織りの仕組みを理解すると、中学生にも織れるのではないかと思われた。

組合によると、ここを訪れるのは、地元住民ではなく、大半が観光客であるといふ。学校教育との関わりについては、糸満市などの比較的遠い地域から社会見学に訪れることがあるが、地元の学校との交流はほとんどないということであった。筆者は、地元の伝統文化は、地元に根づいてこそ受け継がれていくものと考える。そのためには組合、学校と行政が連携して、伝統文化を守っていく必要があると考える。

3. 地域によみがえった織り：知花花織（沖縄市）

知花花織は、旧美里村（現在の沖縄市）の知花、登川、池原などの集落で盛んに織られ、19世紀後半には、技法が確立していたと考えられる〔沖縄県商工労働部商工振興課 2012:55〕。他の花織が緯浮花織であるのに対し、知花花織は、経方向に浮糸が文様を表す経浮花織である。自家用として織られてきたからか、自由奔放で個性的なデザインが多い。

古くは主に村の女性たちが行う「ウステーデ（旧暦8月15日に行われる五穀豊穫を祈る祭り）」の衣装として、また「ウマハラシー（旧暦8月14日に男の祭である馬乗り競争）」で晴れ着として用いられてきた。沖縄戦後には途絶えていたが、2000年、沖縄市に知花花織復元作業所が開設され、知花花織の研究、復興、後継者育成が進められた。2010年には沖縄県の伝統工芸品に、また2012年には国指定の伝統的工芸品に指定され、再興を果たしたといえる。

筆者らは、2013年12月に知花花織事業協同組合を訪ねた。その際、組合が、地域や教育との連携に積極的である印象を受けた。地元の小学生が見学に訪れたり、中学生を職場体験として受け入れていることがわかった。組合は地元の生徒に地域の文化を学んでほしいと考え、生徒も職場体験の実習先に地元の織りの組合を選択していて、生徒自身、地元の伝統文化に興味をもち、知りたい、学びたいと考えていることがうかがわれる。知花花織が、地域の伝統文化教育の基礎をつくりあげていくことが期待される。

4. 地域生活にある伝統文化：琉球紺（南風原町）

紺は、14～15世紀頃、中国や東南アジアの影響を受けながら琉球に入ってきたと考えられている¹。そしてその紺が、琉球の独自の文化を吸収し、薩摩紺や久留米紺などの日本本土の紺のルーツになったと考えられている。琉球紺の文様は600種類以上あるといわれ、「トウイグワー（鳥）」、「イチチマルグムー（五つの丸い雲）」、「ミンティキトーニー（耳付きの豚の餌箱）」など、自然や生活に密着したものがモチーフとなっている。大

正初期から沖縄戦まで、琉球紺の産地は、那覇市泊、垣花、小禄と糸満が中心であったが、その後その下請けや、織りだけを他のつくり手に依頼する「出機」をしていた南風原に移っていった[田中・内藤 2004: 104]。現在では、琉球紺の生産の約9割を南風原町が占めているが、南風原町で本格的に紺が織られるようになったのは大正時代である。当時、木綿が使われていて、中産階級以上の冬の素材として用いられていた。1908年に島尻女子工業徒弟学校が小禄に設立されると、南風原から多くの織子たちが技術向上のために、この学校に入学した。

南風原では、1946年頃から、漁網やロープをほどいて織物がつくられるようになり、素材はまず木綿が用いられ、1960年代からは絹の紺が盛んに織られるようになり、南風原は「琉球紺の里」として一大織物産地となっていった[真南風の会 2002: 113]。

筆者(長田)は、2014年に南風原町のかすり会館で織り体験を行った。そこは地元の主婦のコミュニケーションの場になっていて、地域での交流が盛んに行われていた。

また『南風原の織～琉球紺・南風原花織』[琉球紺事業協同組合 2011]という副教材が刊行されていて、琉球紺の歴史や織り方が児童生徒にも理解できるようにやさしく、かつ詳しく解説されている。

南風原町では、地域の文化を学び伝え、継承していくこうとする織り手や組合側および地域住民によって、琉球紺が強く根づいている印象を受けた。

5. 伝統文化と新しい文化の融合：琉球びんがた(那覇市)

紅型は、織物とは対照的に男性の家業として受け継がれてきた。紅型は、琉球の王族・士族の着物であり、中国や江戸幕府への献上品であった。しかし1871年の廃藩置県後、本土から安価な反物が入ってくるようになり、紅型工房は次々に廃業していった[沖縄県商工労働部商工振興課 2012:43]。

戦後、琉球紅型の再興に尽力したのが城間栄喜氏である。その始まりは、米軍向けのポストカードだった。当時散乱していた小銃、機関銃の弾や

レコードを道具に使用し、紅型をつくった。城間栄喜氏は、着物を作り続けることで紅型の高度な技術を残していきたいと考えた。

伝統的な紅型がつくられる一方で、近年では、組合に属さない若い紅型作家が増加している。彼らがつくる新しい紅型には、本来の紅型の形が崩れるのではないかと懸念する人もいる。しかし紅型工房を主催する屋富祖幸子氏は、社会の変化とともに伝統を取り入れながらもデザインも変化していかなければならぬと語る。そのような考えは、つくり手だけでなく、琉球銀行では、1992年から「紅型デザインコンテスト」を毎年開催している。この催しは、若手工芸家の育成や紅型デザインの新しい領域を開拓するためであるといい、受賞作品は、琉球銀行のカレンダーや通帳、キャッシュカードなどに活用される。

また屋富祖氏によれば、組合では紅型に対する興味、新しい発想を引き出すことを目的として、毎年、子どもへの伝統的工芸品教育事業として、応募のあった小・中学校で、紅型の講習会および製作体験の指導を行っているという。筆者らは、2014年12月に、屋富祖氏の指導のもと、紅型のトートバッグの製作を行った。体験の前には紅型についての講義が行われ、また実際に、屋富祖氏から、筆での顔料の摺り込みの指導を受けた時は、伝統工芸士の技を直に感じることができた。つくる過程においても、楽しみながら伝統文化を学ぶことで、その体験の感動の大きさを実感することができた。屋富祖氏は、児童生徒が紅型を体験することについて、「紅型は糊を落とした後の感動があり、そこで子どもたちの心を引きつけることができる。しかし教師に興味がないとなかなか行動に移せない。そのため方向性を示してあげることが必要になってくる」と話し、学校教育において沖縄の染め織りを体験的に取り上げるために、教師だけでなく、地域の染め織りにたずさわる人の協力や働きかけも重要であることがわかった。

6. 再興された王朝文化：首里織(那覇市)

首里織の起源は明確ではないが、1429年の尚巴志による三山統一以来、明治に至るまで、琉球王朝の首都であった首里では、織物に中国などの

諸外国の技法が取り入れられ、多色で豊かな独自の染め織り文化が築かれていた。

首里織とは、現在、「道屯織」「花倉織」「花織」「手縞（ティジマ）」「諸取切（ムルドウツチリ）」「煮総（ニーガシ）芭蕉布」「花織手巾（ティサーイ）」の7種類の総称である。この首里織の特徴は、他の織りとは異なり、租税として織られてこなかつたことである。首里の女性のたしなみとして、王族や士族の女性たちによって織られていた。首里では、階級によって着用できる色、柄、素材、織り方が決まつていて、花倉織は、王朝時代、琉球の織物の頂点であり、王家の女性や、ノロの最高位にある聞得大君にしか着用が許されなかつた織物である。花倉織は戦後途絶えていたが、大城志津子氏が、その復元を行つた。また宮平初子氏は、現在の首里織の基礎をつくつたとされる。

筆者（長田）は、2014年に那覇市伝統工芸館で首里織を体験した。首里花織には、両面浮花織という技法が用いられ、表裏のどちらも使うことのできる織物である。工芸館では、ここを訪ねる人のほとんどが観光客であり、地元では首里織を知らない人がほとんどであるといった話を聞いた。そこで学校教育との関わりの推進が今後の課題であるといえる。

7. 行政による特産品開発：うらそえ織（浦添市）

うらそえ織は、2006年に、浦添市の「てだこの都市（まち）ものづくりタウン計画」で始まつた浦添市の織物である。浦添市伊奈武瀬のサンシルク2階では、市内の主婦が中心となって染め織りを行い、1階では市のシルバーハンモックセンターの職員によって養蚕が行われている。この養蚕の糸を群馬の絹糸と合わせ、福木やガジュマルなどの身近な植物染料と化学染料で染めているといふ。

筆者らは、2013年にうらそえ織結の会を訪れた際、煮織の工程や絹糸引きの工程を見学した。結の会の通事克子氏によれば、学校教育との関わりについては、小学校の社会科見学を受け入れ、糸引きや織りの指導を行つたり、中学生の職場体験を受け入れているということであった。うらそえ織結の会が発行しているリーフレット『うらそえ織ハンドブック講座』には、製造の工程や

自宅でもできる植物染料での染色方法、蚕についての説明などが記載され、地域の小・中・高校生にもわかるように解説されていて、学校教育と積極的に関わっている。さらにうらそえ織では、活動や情報をブログで発信したり、蚕や福木、車輪梅、月桃などの植物染料で染めた糸が展示されている。浦添市のイメージガールである「てだこレディ」のユニフォームにうらそえ織が使われていることからも、地元の人をはじめ、多くの人に訪れてもらい、うらそえ織を知ってほしいという意図、地域とも積極的に関わっていこうとする姿勢が理解できる。

うらそえ織は、伝統染織ではないため、比較的自由で開放的な印象を受ける。新しい織りの開発には、八重山上布や首里織という伝統染織の技術が用いられ、それらのつくり手の協力があったといふ。伝統染織から学びながら新しい織りを創造する柔軟さが、うらそえ織にみられる。

8. 地域を支える新しい染め織り：ウージ染め（豊見城市）

ウージ染めは、1989年に、当時の豊見城村商工会が取り組んだ「むらおこし事業」の一環である特産品のアイディア募集において、地元の女性がウージ染めを提案し採用されたのが取り組みの始まりである。豊見城市は、野菜や果物栽培などの第一次産業の盛んな地域であり、その中でもサトウキビ（ウージ）の生産量は、県内でも上位を占めている。ウージ染めは、伝統工芸ではなく、「生活工芸品」として位置づけられる。サトウキビの葉や花で糸を染めて織られた布を使って、バッグやテーブルマットがつくられてきた。

豊見城市ウージ染め協同組合では、島尻教育委員会と連携をとり、豊見城市的特産品を知つてもらう目的で、教師の初任者研修の中に、ウージ染めの体験を取り入れているといふ。そしてその研修を受けた教師が、生徒にも伝えたいと、学校単位でウージ染めの体験や見学に訪れるといふ。主に小学校4年生が総合学習の時間を利用して、見学や体験を行つてゐるが、中学校や高校からはこれまでないといふ。組合を訪れる児童たちは、ウージ染めの緑の色合いに興味をもち、自分の地元にこのようなものがあったのかと、今まで知らな

かった地域のことを学ぶという。また市内の幼稚園では、地元の農業協同組合 JA の協力を得てサトウキビを育て、収穫した葉でウージ染めを体験するという、長期的な学習を取り入れている。

ウージ染めは、これまで専業主婦であった地元の女性に、仕事の場を提供していて、女性たちの生き甲斐となり、自立をうながすものとなっている。

9. 自然と共に存する織り：八重山上布（石垣島）

八重山上布は白上布ともよばれ、白地にこげ茶の絣文様が特徴的である。八重山上布の起源は、一説によれば、1615年に沖縄本島の機織の技術者が八重山で技術指導を行ったのが始まりとされる〔吉田 2002:71〕。八重山上布は人頭税として織られた布であり、租税制度が技術を高めていった。

筆者らは、2015年1月に、八重山上布作家の新垣幸子氏に話をうかがった。当時の貢納布には、一般税としての定納布と、王や士族、薩摩藩からの特別注文である御用布の2種類があり、前者は上・中・下の白無地、後者は紺嶋布や赤嶋布とよばれる絣織物であった。当時、選ばれたものだけが御用布を織ることができたが、織りは過酷な作業であった。しかし一方で、いったん織りが認められると、手の甲にハジチとよばれる織文様の入れ墨を入れることができたという。このことから、織りに誇りを感じ、生き甲斐になった織り手もいたことが想像できる。

摺り込み捺染技法は、八重山上布にのみ用いられている。これは1888年に開発され、クール（紅露）の濃縮液を竹筆で摺り込んで糸をつくる技法である〔児玉 2005:102〕。八重山の人々は、1973年に新垣氏が括り染めを復活させるまでは、摺り込み捺染が昔からの技法であると信じていたが、新垣氏によって、括り染めが行われるようになった。現在、若い織り手が増えた一方で、細い糸の績み手が育たないという問題がある。新垣氏は、これまでの織り手と績み手の関係を、「昔、お嫁さんが織りを、織りができなくなったおばあちゃんが、嫁や孫のために糸を績んでいた」と話した。しかし今ではそのサイクルが崩れています。

指摘した。新垣氏は、高齢者が糸績みを続け、地元の産業に貢献してほしいと考えている。

新垣氏は、括った糸を、クール、ひるぎ（マングローブ）、福木などの植物染料で染める。その色は、「自然からいただいた色」と考えている。植物染料では思い通りの色が出ないことがあるが、風土を活かした染め、織りを続けていきたいと考えている。

10. 伝統を継ぐ織り：八重山ミンサー（竹富島）

八重山ミンサーは、現在のアフガニスタン周辺に起源をもつ小さな絣文様の帶が、チベット、中国を経て伝來したものという説もある〔沖縄県商工労働部商工振興課 2012:53〕。ミンサーとは、木綿織の帶をいい、「ミン」は中国語で「綿」を、「サー」は「狭」を当てた「綿狭織」または「綿狭帶」の略ではないかともいわれている〔沖縄県商工労働部商工振興課 2012:53〕。ミンサーは、かつて通い婚の風習があった八重山地方で、女性から男性に送られたものであり、五つと四つの碁盤の絣模様は、「いつ（五つ）の世（四）までも」との願いが込められているという。これは、アマンダ・スティンカムによれば、1950年代につくられた意味ではないかとされる〔スティンカム 2002:19〕。しかし現在、その模様の意味が、ミンサー模様の由来として商業的に活用されている。

八重山ミンサーは、本島の紋織のミンサーとは異なり、平織である。かつては八重山全域で織られていたが、戦後衰退し、現在では竹富島のミンサーが最もよく知られている。現在では帶だけではなく、バッグやアクセサリーなどにも、いわゆるミンサー柄が使われ、沖縄をイメージするものとなっている。

また学校との関わりもみられる。2005年に、八重山商業高校はミンサー柄を制服に取り入れ、男女のカッターシャツのポケット部分とネクタイにミンサーが使われている²。2008年には、竹富小・中学校の技術科の授業で、ミンサー織りが取り上げられ、児童生徒に、地元の染め織りを理解してもらう試みが行われている〔あざみやミンサー記念事業委員会 2009:238-239〕。竹富町織物事業協同組合の島仲由美子氏は、「見えない仕

事」を見てほしいといい、「見えない仕事」を学ぶこととは、大量生産・大量消費でものがあふれる環境の中で、それとは反対に時間をかけてつくる人々のものづくりの思考を理解し、ものを大切にする気持ちを育むことであるといえる。

11. 文化的継承と世代間の差：宮古上布（宮古島）

宮古島では、他の地域と同様、古くから染め織りが行われていたと考えられているが、現在のような宮古上布の始まりは、1583年に稻石刀自という女性が、琉球王府に「綾錦布」を織って献上したことであるとされる〔吉田 2002:69〕。琉球王朝時代には、女性は上布を納めることが義務づけられてきた〔與那嶺 2009:106〕。しかしこのことが、上布の細い糸を績む技術や織りの技術を向上させてきた。宮古上布は、江戸時代には本土に運ばれ、当時琉球を支配していた薩摩の名がつけられ、「薩摩上布」として市場に出回っていた。それ以前、宮古上布には、鮮やかな地色に大柄の絣を配したものもあったが、「江戸好み」によって、濃紺に白の絣模様が定着していった〔與那嶺 2009:106〕。

人頭税が廃止された1903年には、宮古郡織物組合が設立され、宮古上布づくりは、宮古島の地場産業として発展していった。当時の年間生産量は、最盛期には1万反を越え、織りは収入の良い仕事であった。しかし戦後、洋装化の影響もあり、宮古上布の生産量は減少し、2002年には10反にまで減少した³。

宮古上布は分業制である。現在、材料となる苧麻の績み手は、95%が70歳以上といわれ⁴、高齢化が進んでいる。苧麻糸の確保が困難となってきたため、組合や行政によって糸績み教室が各地で設けられるなど、績み手の育成がはかられている。これらの教室では、糸績み教室が高齢者のコミュニケーションの場となり、生き甲斐になっているケースもあるという⁵。外出の機会が少ない高齢者にとって、糸績み作業で集まる仲間との会話は楽しみであり、また指先を使う作業は、老化を防ぎ健康的な暮らしに良いといえる。2007年には、宮古苧麻績み保存会によって、苧麻が宮古上布になるまでの過程を小・中学生にもわかるように解

説したテキスト『苧麻糸物語』〔宮古苧麻績み保存会 2007〕が発行された。

宮古織物事業協同組合は、地域の伝統文化を継承するためにさまざまな取り組みを行っている。県の事業やインターンシップを積極的に取り入れ、小学生を対象に組合の仕事を伝えたり、高校生のインターンシップでは、宮古上布の歴史の講義や糸績み、織り、染め等の体験を行っている。また島の文化祭や産業まつりなどで、子どもを対象に織物体験・藍染め体験を毎年恒例で行ってきた。

今後、若者に宮古上布を伝えていくことが大切である。2004年の資料〔松本・山里 2004:53-67〕では、宮古島に住む10代の若者の84%が「宮古上布に興味がない」と答え、宮古上布の将来について、55%が「なくなてもかまわない」、「どちらともいえない」と回答したという。現在、組合や行政の取り組みによって、この状況は改善されていると想像されるが、宮古上布を、島の若者にどのように伝えていくかが、今も大きな課題である。

12. ユイマールで行う染め：久米島紬（久米島）

久米島紬は、18世紀中頃、堂之比屋が中国から養蚕の技術を導入し、越前や薩摩の技術とも合わせてつくられるようになったといい〔沖縄県商工労働部商工振興課 2012:50〕。久米島紬も人頭税であって、1903年まで強制的に織られ、その反対に紬織の技術は向上していった。

久米島には、鉄分を含んだ田泥や植物染料が多くあり、明治以降、久米島紬を島の産業とするため、技術の伝承・教育が行われてきた。1905年には生産性を高めるために、久米島紬は黄繭から白繭を素材とし、地機から高機が用いられるようになり、絣括りの技法も改良されて、その生産は最盛期を迎えた〔與那嶺 2009:102-103〕。しかし現在では養蚕は行われなくなり、以前は中国から、現在はブラジルから絹糸を輸入してつくられている。

久米島紬の伝統的技法は、今も受け継がれている。1カ月の間、毎日テカチ（サルトリイバラ）やクールの植物染料を煎じた染液で糸を染め、そ

の後、泥染めを行う。1日5～7回の染めと天日干しを繰り返し、その作業を2日間行う。作業は、親戚や仲間で相互に協力し合い、この相互の協力を「ユイマール」という。実際に現在、泥染めの日には、親戚や友人が早朝から集まり、お互いに協力し合って行われている。泥染めは、織る糸の1年分をあらかじめ括って用意し、一度に染められる。染め織りを家業とする家は年々減少しているというが、今後もユイマールによる染め織りが伝えられていくことが望まれる。

13. 郷土学習としての織り：与那国織（与那国島）

1477年に、与那国島に漂着した朝鮮人によって書かれた『李朝実録』に収録されている「琉球見聞録」によれば、当時、苧麻を織った衣服が着用されていたという〔吉田 2002:78〕。現在、与那国織には、花織の他、カガンヌブー（ミニサー帯）、シダティ（手巾）、ドウタティ（白と黒の細かい碁盤目模様の着物）という4つの種類がある。

与那国はかつて「ドナン（土南、渡難）」とよばれていた。岩礁が多く波は荒く、島に渡ることが難しいため、島の人々にとって、他の島々との交流は危険であった。そのため、親族が島を離れる際には、見送る人は航海の無事を祈って、シダティをお守りとして贈った。

与那国中学校では、総合的な学習の時間を「どうなんタイム」と名づけ、郷土学習を行っている。織物、舞踊、三線、棒座、方言の5つのコースに分かれ、年間で1年生が50時間、2・3年生が70時間、1つのコースを選択して学んでいるという。この活動は1993年に始まり、生徒たちが、地元の与那国文化を学んでから、島外の高等学校に進学してほしいということで行われている。織物のコースは人気があり、6台の機では希望者すべてを受け入れることはできないという。織物コースで学んだ生徒が高校進学後、染織専門の学校に進学し、与那国に帰って織り手になるケースもある。

現在、与那国には島外出身の織り手が育ち、与那国織の伝統を受け継ぎながら糸の色や布の模様をアレンジした与那国織がつくられている。こうして与那国織は、島外者や地元出身者によって受け継がれている。

14. まとめ

筆者らは、沖縄県の13種類の染め織りの聞き取りを行い、特に筆者（長田）は、4種類の織りを体験した。それらの織り体験を通して、織る技術の高度さを感じ、自分で作品をつくることで、楽しみながら地域の伝統や文化を学ぶことができた。そして地元にある染め織りを伝えていきたいという気持ちがさらに強まった。学校で体験を通して染め織りが教育されることには、児童・生徒に感動を与え、職業観の形成をうながす意義があると考えられる。

沖縄は染め織りが多様に盛んに行われている地域であるが、さらにうらそえ織やウージ染めなどの新しい染め織りが誕生し、地域に根づいている。しかし実際に沖縄の染め織りの多様性を知る人は少ない。また地元の染め織りにふれる機会が少なく、その存在を知らない人も多い。今回聞き取りを行ったつくり手は、皆、地元の若い人にこそ染め織りを知ってほしいと考えている。かつては祖母や母から受け継いで学んだ染め織りであるが、時代の変化に伴い、染め織り自体のあり方だけでなく、地域の伝統や文化の受け継ぎ方も変えていく必要があり、教育の中で染め織りを取り上げることは、子どもが地域文化を知り、尊重する態度を養うためにも必要であるといえる。

また今回の聞き取りを通して、染め織りや糸績みがつくり手の生き甲斐になっていること、つくる場がコミュニケーションの場になっていることがわかり、このような染め織りを行う人々のあり方を学ぶことも有意義であると考えられる。

III 小学校・中学校での染め織り教育の現状と課題

次に、実際に沖縄県の小・中学校でどのように染め織りが教育されているのか、またそれについての教師の考えについて考察する。

1. 小学校での染め織り教育

2014年11月に沖縄県内小学校150校に郵送でアンケート調査を行った。質問項目は、地元で染

め織りが行われているか、染め織り教育の実際、授業での取り上げ方についてである。そのうち41校から回答があった。有効回答率27.3%という回答率の低さから、小学校教師が多忙であること、染め織りへの関心が薄いことが考えられる。しかし本アンケート調査票が記述式であるため、回答から考察を導くことは有効であると考える。

(1) 調査した小学校の所在地

調査対象にした小学校の所在地、沖縄県内11市11町19村のうち、大宜味村、東村、本部町、金武町、名護市、恩納村、読谷村、うるま市、沖縄市、北谷町、西原町、宜野湾市、北中城村、中城村、浦添市、那覇市、豊見城市、糸満市、南城市、八重瀬町、南風原町、久米島町、伊江村、竹富町、宮古島市の10市8町7村の中学校41校から回答を得た。

(2) 地域での染め織りの有無

41校のうち、地域に染め織りがあると回答した学校は20校あり、それらは芭蕉布、藍染め、久米島紬、読谷山花織・ミンサー、知花花織、紅型、うらそえ織、ウージ染め、琉球絣、宮古上布であった。また地元に染め織りがあっても、その地元の染め織りを認識している学校とそうでない学校がみられた。

(3) a 沖縄の染め織りを授業の中で取り入れているか

取り入れていると回答した学校は20校あった。そのうちの10校が、小学校のある地域の染め織りを取り入れていた。

b 取り入れている染め織り

小学校で取り入れられている沖縄の染め織りは、紅型と読谷山花織・ミンサーが多い。これらは、那覇市や読谷村以外の学校でも取り入れられている。

c 取り入れている授業

沖縄の染め織りを取り入れている授業は、総合学習が最も多く、次いで社会科、図工科、家庭科であった。また2科目以上で取り入れている学校が12校あり、小学校では教科横断的に取り入れられていた。

d 授業での取り入れ方

実際に作品をつくる体験的な学習が半数以上あり、中には講師を招いて指導をしてもらうと回答した学校もあった。卒業作品や家族へのプレゼントなど、他の目的も兼ねて授業を行っている学校もあった。さらに少數であるが、調べ学習を取り入れ、知る学習から体験的な学習へと段階的に取り入れている学校もあった。

e 染め織りを授業で取り入れる目的

取り入れる目的としては、沖縄の伝統文化を児童に伝えることという学校が40パーセントで最も多かった。染め織りを学ぶことは、知るだけではなく、つくり手の努力や工夫を感じ、今後の自らの生活に置き換えて考えてみることや、地元を知り、沖縄県出身者「ウチナーンチ」としてのアイデンティティの確立にもつながると考えられている。

f 染め織りの授業後の児童の変化

地域の染め織りに関心・興味をもつ児童が多くみられるようになり、学んだことを他者に伝える児童、製作したものを生活に活かそうとする児童がみられたという。このように染め織り教育の意義は大きいといえる。

g 染め織りを授業で取り入れていない理由

取り入れていない21校で、その理由は、「年間計画に位置づけられていない」が18%で最も多く、次いで「学習指導要領・教科書に記載がない」が9%であった。授業後の児童への効果を考えると、染め織り教育を年間指導計画に位置づけ、学習につなげていってほしいと考える。

(4) 小学校学習指導要領家庭編「C 快適な衣服と住まい (1) 衣服の着用と手入れ・(3) 生活に役立つ物の製作」領域で、どのような授業を行っているか

a「衣服の着用と手入れ」領域

「日常の快適な着方」の分野では、衣服の保健衛生上・生活活動上の働きと関連させ、夏を涼しく、冬を暖かく過ごすための着方、つまり気候の変化に応じた着方の指導を重点的に行っているといえる。「日常着の手入れ」については、身近な洗濯を取り上げ、洗濯実習を行っていることがわかった。

染め織り教育と関わらせるには、昔エアコンがなかった時代に、先人たちがどのような衣服を着て夏の暑さをしのいでいたかを考えることなどがあげられよう。

b 「生活に役立つ物の製作」領域

製作計画を立てて、ミシンや手縫いでナップザック、エプロン、マイバッグ、小物づくりを重点的に行っていることがわかった。製作の基礎的知識・技能を習得することが求められていて、比較的多くの授業時数が必要である。ここでは、実際の染め織り布ではなく、入手しやすい染め織り柄がプリントされた布地を使った小物づくりなどが考えられる。

(5) a 回答した教師の基本属性

回答した教師は、回答者の性別が明らかな回答によれば、女性が31人、男性が5人であった。年代については、30代が最も多く、次いで40代であり、30代と40代が半数を超えていた。

b 小学校家庭科で沖縄の染め織りを生徒が学ぶことについての教師の考え方

小学校家庭科に沖縄の染め織りを取り入れる意義は大きいと考える教師が多いが、実際は家庭科だけに限ると時間の確保が難しく、他教科との横断的カリキュラムが必要であると考えている教師が多かった。また児童が実際に染め織りに触れる機会を設けたいという気持ちはあるが、教師自身が染め織りの知識がないため、つくり手の協力が必要であると考えていた。しかし具体的にどのようにつくり手と連携をはかるのかわからないという意見があった。

c 児童に沖縄の伝統文化を伝えていくたい・伝えなければならないと思うこと

児童に沖縄の伝統文化を伝えることについて、回答したすべての教師が肯定的な考えをもっていた。児童が伝統文化を学ぶことで、地元への愛着や誇りを育てたいと考える教師が多い。しかし中には、伝えたいが、実際、時間に余裕がなく取り入れにくいという回答もあった。また染め織りが身近にない地域もあり、すべての地域で染め織りを取り入れることが、必ずしも必要ではないという意見もあった。

d 今後取り入れたい地域教材

今後取り入れたい地域教材は、食生活分野が44%と最も多く、次いで衣生活分野の12%であった。食生活分野では、郷土料理や地域の食材を用いた調理実習という回答が多くみられ、給食と関連づけて学ばせたいと考える学校もあった。衣生活分野では、染め織りという回答が多く、中には組踊りの衣装を取り上げたいなどの回答もあった。このように家庭科だけでなく、音楽など他教科と関連させた学習を考えている学校もあった。また行事と食生活分野・衣生活分野など、複数の分野を関連づけ、学習する方法も考えられている。

(6) a 教師の沖縄の染め織りを学んだ経験の有無と学んだ染め織り

沖縄の染め織りを学んだ経験のある教師は15人であった。その中には学生の頃の体験が今でも強く印象に残っていると回答した教師もいた。また教職に就いてから学んだと回答した教師は、校内研修や初任者研修等で学んだ、教材研究のために学んだなどの回答であった。学んだ染め織りは、紅型が最も多く、次いで草木染め、藍染めとなっていて、染め織りを学んだと回答した88%が、染めを学んでいることがわかった。織りは、1クラス全体で体験するには多くの織機が必要であり、取り入れにくいが、染めは人数に関係なくできるので取り入れられやすいと考えられる。

b 学んだ染め織りを教育の中で活かしているか

染め織りを学んだ経験のある15人の教師のうち、学んだことを授業で活かしたと回答したのは8人であった。教科横断的な学習を取り入れ、調べ学習をし、その後講師を招いて染め織り体験をする方法があげられた。

c 教師・生徒が染め織りを学ぶことをどう考えるか

63%の教師が学んでみたいと回答した。児童に染め織りを伝え、自分の視野を広げるために学びたいという意見があった。しかし3%の教師が、生徒の学力向上が優先されるので、染め織りを学ぶ時間的・精神的余裕がないと回答した。

2. 中学校での染め織り教育

(1) 調査した中学校の所在地

沖縄県内の中学校 100 校へアンケート調査を郵送で依頼したところ、23 校から回答を得た。回答率の低さから、中学校教師が多忙であること、染め織りへの関心が低いことが考えられる。しかし本調査票は記述式であるため、回答から考察を導くことは有効であると考える⁶。

回答を得た中学校の所在地は、沖縄県内 11 市 11 町 19 村のうち、名護市、うるま市、沖縄市、那覇市、豊見城市、糸満市、南城市、宮古島市、石垣市、北谷町、南風原町、八重瀬町、竹富町、恩納村、読谷村、北中城村、伊是名村、渡名喜村、伊江村、粟国村の 9 市 4 町 7 村である。

(2) 地元の染め織りの有無

23 校のうち、地元に染め織りがあると回答した中学校は 8 市町村の 8 校であった。回答の中には、本研究で取り上げていないギンネムの葉で染める「ギンネム染め」もあった。また首里織、紅型、ウージ染めのように、那覇市や豊見城市など、地域に染め織りがあるにもかかわらず、それを認識していない学校があった。このことから、教師の地元文化への関心が少ないと、学校と地域との結びつきが弱いことが考えられる。

(3) a 染め織りを授業に取り入れているか

23 校中、沖縄の染め織りを授業に取り入れていると回答した学校は、恩納村、糸満市、那覇市にある 3 校であった。それら 3 校とも、地元に染め織りはないと答えていた。このことから、地元に染め織りがあることが、授業に染め織りを取り入れることとつながらないことがわかった。

b 取り入れている染め織り、取り入れている授業

授業に取り入れられた染め織りは、紅型、首里織、琉球絣、読谷山花織・ミンサー、ウージ染め、宮古上布、八重山上布、久米島紬で、取り入れられる染め織りは、中学校のある地域と関わりがないことがわかった。またこれらの中学校では、家庭科でのみ取り上げられていた。

c 授業への取り入れ方

授業では、染め織りが郷土文化、伝統文化とい

う視点で取り上げられている。3 校とも、染め織りを紹介、説明するのみにとどまっていて、実践的活動や体験活動は行われていなかった。

d 授業で取り上げる目的

沖縄の染め織りを郷土文化、伝統文化として認識し、継承することを目的として取り上げている。家庭科教師の沖縄の染め織りや伝統文化に対する意識の高さがうかがわれる。

e 授業後の生徒の変化

沖縄の染め織りの紹介を行うにとどまっている学校では、生徒は、染め織りに関心は少なく、授業後の変化はあまりみられないとしている。教師は、生徒の関心が少ないと認識していて、知るだけにとどまらず、織り見学や体験するなどの、実践的教育が必要である。

f 染め織りを授業で取り上げない理由

最も多いのが、「時間に余裕がない」で、年間授業計画に位置づけられていない染め織りを授業で取り上げる余裕がないといえる。染め織りを取り上げるか取り上げないかは、家庭科教師の意識に任されている。中には、教師自身の知識不足で取り上げることが難しいと回答した例もあり、教材が少ないと、授業で取り上げられていない理由の一つであると考えられる。

(4) 中学校学習指導要領家庭編「C 衣生活・住生活と自立 (1) 衣服の着用と手入れ、(3) 衣生活・住生活などの生活の工夫」について、どのような授業実践を行っているか。

a 衣服の着用と手入れ

「(1) 衣服の着用と手入れ」では、小学校では手洗い洗濯を基本としているため、小学校での学習をふまえて、しみ抜きを加えた洗濯実習を行っている学校が多い。また和服を取り上げている学校も多く、和服や、沖縄の気候に合わせて、沖縄の伝統的な染め織りを紹介する例もみられた。開隆堂の教科書には、発展の項目として、自分の住む街の衣文化を調べる課題が記載されている。そこでは紅型、宮古上布、八重山ミンサーが紹介されていて、「(3) 衣生活・住生活などの生活の工夫」については、この単元で、沖縄の染め織りを取り上げることは充分に可能である。しかし実

際に取り上げている学校はなく、地元では、沖縄の衣文化が重要であるとは認識されず、注目されていないことがわかった。

b 衣生活・住生活などの生活の工夫

衣生活・住生活などの生活の工夫について、回答では、ティッシュカバーやエコバッグの製作が行われていて、エコバッグについては、身近な消費生活と環境との関連をはかったものと考えられる。また住生活についての実践が多く、沖縄の気候風土に合った伝統住宅の工夫を紹介している例がほとんどであった。この単元では、衣生活・住生活ともに気候や地域性を取り上げた実践が行われている。教科横断的な学習を計画するには、沖縄の染め織りは適した題材であるといえる。

(5) a 中学校家庭科で、沖縄の染め織りを生徒が学ぶことについての教師の考え方

18名の教師が、中学校家庭科で染め織りを学ぶことに積極的であるが、実際に染め織りを取り上げている学校は3校であった。生徒に沖縄の伝統を知ってほしい、地元に関心や誇りをもってほしいと考え、沖縄の染め織りを授業で取り上げていた。しかし実際に授業に取り入れられた場合は少ない。その理由としては、「時間に余裕がなく、取り上げることが難しい」、「取り上げたいが、自分の知識不足で教えきれない」があげられた。限られた時間の中で沖縄の染め織りを実践的に取り上げていること、また染め織りは、家庭科教師にとって身近ではなく、専門的な知識を有していないため、取り上げることがむずかしいという意見があった。

b 生徒に沖縄の伝統文化を伝えていきたい、伝えなければならないと思うこと

沖縄の文化を生徒に伝えていきたいと回答した学校は70%あり、「わからない・興味をもった時に学べばよい」と回答した学校は11%であった。伝えていきたいと回答した学校は、生徒が地域や、地域の文化を知らないことに危機感をもっていて、伝えていかなければならないと思っているが、授業に位置づけがないことや、取り組む時間がないなどの理由から、実践へは至っていないことがわかった。また地域や保護者の協力が必要と考えている学校もあり、地域や保護者の理解が求

められている。

c 今後どのような地域教材を取り上げていきたいか。

今後取り上げてみたい地域教材は、食生活分野とする回答が最も多かった。その理由としては、食は生徒の生活に直結していて授業に取り入れやすいこと、生徒の興味・関心も高いことがあげられている。食生活分野では、取り上げたい郷土料理や地域の特産品を具体的に回答している教師が多く、生徒だけでなく教師も地域の食に対して興味・関心が高く、身近に感じているといえる。

また衣生活分野については、回答があった4校すべてが染め織りを取り上げたいと答え、住生活分野においては、沖縄の伝統的な住まいを例に、家の構造や住まいの工夫を伝えたいという回答があった。「写真を使ったりしてまとめられた教材があると、授業に取り入れやすい」という回答から、沖縄の染め織りを授業で取り上げる際に、パワーポイントを用いた授業が効果的であると考える。衣生活分野においてなかなか地域教材が取り上げられていない背景に、染め織りが生徒や教師の身近になく、教材にする場合の協力者を搜すことが困難であったり、生徒や教師の興味・関心が少ないと考えられる。そのため染め織りを教材化するには、生徒が身近に感じられるように、生徒の生活をとらえたアプローチを行うことに気をつけたい。

(6) a 沖縄の染め織りを学んだ経験

沖縄の染め織りを学んだ経験があると回答したのは10人であった。沖縄の染め織りを学んだことがないと回答したのは8人で、無回答が5人であった。

沖縄の染め織りを授業で取り上げていると回答した3校のうち2校では、教師が沖縄の染め織りを学んだ経験があると回答していた。しかし沖縄の染め織りを学ぶことが必ずしも授業実践につながるとはいえず、授業時数の確保の困難さがあると考えられる。

沖縄の染め織りを学んだ経験があると回答した中には、個人的に学んだ、教材化のために学んだ、そして教員研修の一環として学んだという3つのタイプがみられた。また染め織りの中では、4人

がウージ染めを学んだと回答した。

b 染め織りを学んだ経験を教育の中に活かしているという授業実践等

学んだ染め織りを授業で取り上げたことがある教師は、沖縄の染め織りを学んだ経験があると回答した10人中、4人であった。旧学習指導要領の下で染め織りを取り上げたことがあるといい、改訂後、取り上げる時間の余裕がなくなったことが考えられる。

c 教師として染め織りを学ぶことについてどう考えるか

回答のあった17人全員が学んでみたいと回答していて、無回答はあったものの、学ぶことに否定的な回答はなかった。教師が研修や体験で沖縄の染め織りを学ぶ機会があれば、教育につながるが、学ぶ時間をもつことがなかなかできないようである。そこで視覚的に理解できるパワーポイント教材を作成し、提案することにしたい。

3.まとめと考察

以上に述べた小学校と中学校のアンケート結果から、学校における染め織り教育の現状と課題について考察する。

(1) 地元の染め織りの有無と染め織りの授業との関わり

小学校では、地元に染め織りがあることが、それを授業で取り上げることへつながっているといえる。それに対し中学校では、地元に染め織りがあることと、染め織りを授業で取り上げることとの関連はないといえる。また中学校では、地元に染め織りがあると回答した8校で、地元の染め織りを授業で取り上げている学校はなかった。このことから、地元に有益な教材があるにもかかわらず、授業の中で取り上げられていないことを、中学校家庭科衣生活分野の課題の一つとみなし、それに向けた解決方法を考えたい。

(2) 染め織りを取り入れている教科と授業効果との関わり

小学校では家庭科以外にも総合学習や社会科などで地域の染め織りを取り上げていた。教科横断的な授業、体験的な授業を取り入れることで、授

業後に児童が地元の染め織りに興味をもつようになった、大切にしていきたいという気持ちが芽生えたなどの変化がみられたという。

その一方で、染め織りを授業で取り上げていると回答した中学校は、すべて家庭科のみで行っていた。ここでは体験的な授業を取り入れている学校はなく、教師自身、生徒の興味を引き出すためには、実物にふれる機会をもつ必要があると感じていた。

以上より、染め織りを授業で取り上げる際には、調べ学習や見学といった「知る学習」から、実際に製作する、つくり手と交流するといった「体験的な学習」への二段階の学習を行うことが有効であると考えられる。

(3) 小・中学校家庭科における染め織り授業の課題と提案

小学校では担任が全教科の指導を行うため、横断的なカリキュラムを組みやすく、調べ学習から実践・体験へと段階的な学習を取り入れることが可能であると考えられる。しかし染め織りを授業で取り上げていない理由で最も多い回答内容は、小学校・中学校とも、「年間指導計画への位置づけがない」ためであり、染め織りを授業で取り上げる際には、染め織りだけに焦点を当てるのではなく、学習指導要領に位置づけられている内容と関連させ、複合的な学習方法が求められる。また教材研究の時間がない、具体的に授業の方法がわからない、教師自身に染め織りの知識がない、パワーポイントの教材があるとよい、という回答をふまえ、パワーポイントによる沖縄の染め織り教材を提案し、地域の染め織りを授業に取り入れるきっかけをつくりたいと考える。

IV 中学校家庭科に向けた染め織り教材の提案

1. 中学校家庭科における染め織り教育の提案

以上の考察をふまえて、中学校家庭科で染め織りの授業を行うための導入的な教材を提案する。生徒の現在の衣生活と関連づけ、生徒の「体験したい」という関心、意欲を引き出す教材をテーマとした。

2. 中学校家庭科の染め織り教材の提案

パワーポイント教材「沖縄の染め織り」

＜導入＞ 外国人の友人に、「沖縄について教えてよ」と言わされたことを生徒に想像してもらい、その作業を通して、沖縄で生活しているながら、自分自身が地元の染め織りについて認識していないこと、またそれが自分の生活の中でどのような位置づけにあるのかを再認識する。その際、沖縄が染め織りの盛んな地域であること、沖縄の染め織りの多様性や伝統的工芸品の定義についてもふれ、これから学習する沖縄の染め織りの概要を知るとともに、現代の沖縄の人の生活に結びついていないことを伝える。

あなたは、沖縄の染め織りに触れる機会はありますか？



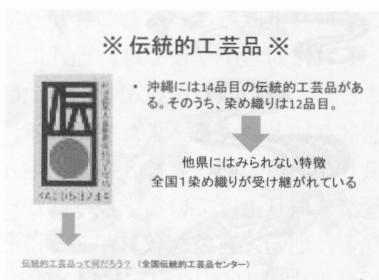
沖縄のことについて
教えてよ！



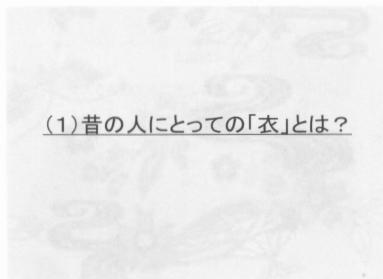
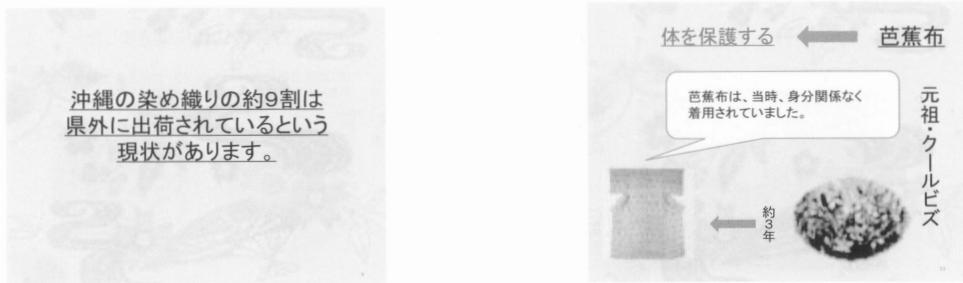
沖縄の染め織り



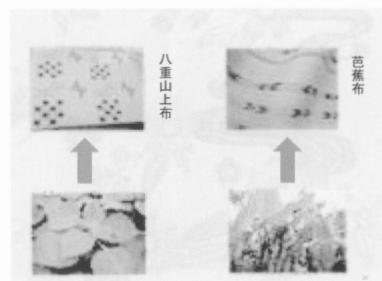
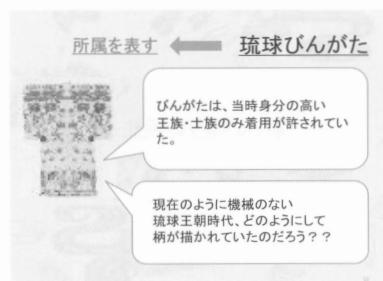
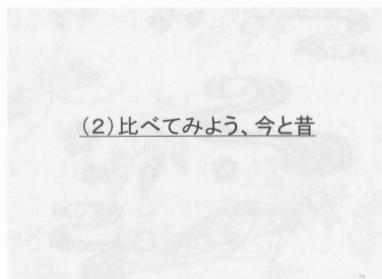
ずっと昔から受け継がれてきた
染め織りの他に、平成に入って
生まれた新しい染め織りがあります。

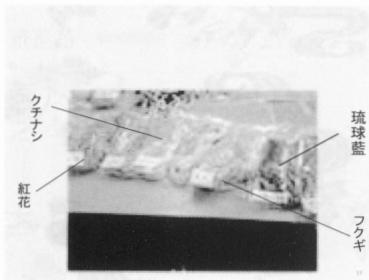


＜1＞ ここでは、小学校での学習の振り返りも兼ねて、衣服の働きについて確認する。さらに沖縄の染め織りによる衣服の働きを考える。さらに紅型の技法についての問い合わせや、芭蕉布がなぜ身分に関係なく着用されていたのかの問い合わせを取り入れた。



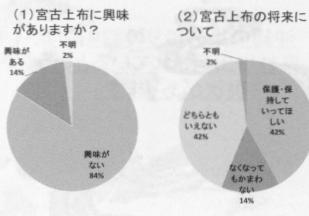
<2> ここでは、生徒が普段着用している衣服がどのようにつくられているのかを考えるとともに、昔の衣服についても考える。そして現代と昔とを比較しながら、昔は身近な動植物を利用して衣服をつくっていたことを学ぶ。



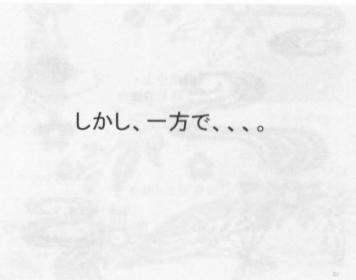


<3> ここでは、染め織りの衣服としての側面だけでなく、現代における染め織りを取り巻く環境について考える。「宮古上布を例に」では、生徒と同じ10代の子どもが、地域の染め織りについてどのような意識をもっているのかを知り、さらに生徒自身がどのように考えているのかを問いかける。そして宮古上布の糸が不足している現状をふまえ、同時に保存会による糸績み教室が、高齢者のコミュニケーションの場や生き甲斐になっていることを学ぶ。そして「新しい染め織り誕生」として、ウージ染めを取り上げ、特産品としての視点、サトウキビを再利用して染めるエコの視点、さらに女性の活躍の場としての視点でウージ染めを学ぶ。その後、伝統と創造について考え、これから伝統文化のあり方について考える。

宮古島の10代に聞きました



しかし、一方で、...



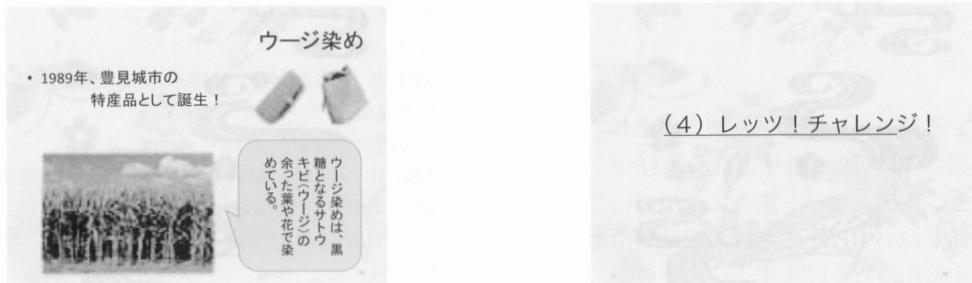
(3)織りの現在

足腰の弱い高齢者にとって、コミュニケーションの場となっており、また、生きがいにもなっている！



宮古上布を例に

新しい織りの誕生



<4> 最後に、調べ学習の提案を行い、さらに体験的学習やつくり手との交流へつなげる。

3. 課題と展望

本研究では、地元の伝統文化を理解し、地域に誇りをもった生徒を育てるために、中学校家庭科における沖縄の染め織り教育の提案を行った。しかしここでは、導入教材にとどまり、体験的な授業の提案までには至らなかった。そのため本研究の教材を活かし、家庭科の授業で導入を行い、生徒の沖縄の染め織りへの関心を高めた後で、沖縄の染め織りについての調べ学習、さらに体験的な学習へと結びつける教材の提案をさらに行っていきたい。

筆者は、本研究を通して、沖縄の染め織りが、沖縄の人々の日常生活と乖離していると感じ、染め織りを含めた地元の伝統文化を、学校教育だけでなく、家庭や地域と連携して継承していくことが重要であると考える。そしてそれが一方的な学びにならないために、体験的な学習やつくり手と交流する学習を通して、生徒に自発的に伝統文化の継承をうながす教材を提案していきたい。

なお、本稿は、平成26年度教育学部学校教育教員養成課程生活科学教育専修4年次、長田真理子による卒業研究『中学校家庭科における染め織り教育の可能性』をもとに修正加筆したものである。

謝辞

本研究で資料収集、聞き取り調査に応じて下さった沖縄県内13の染め織り組合およびつくり手の方々、そしてアンケート調査にご協力いただきました沖縄県の小学校・中学校の家庭科関連の先生方に深くお礼申し上げます。

＜引用文献＞

「あざみや・ミンサー記念事業」委員会

2009年『ミンサー全書』南山舎。

沖縄県商工労働部商工振興課

2012年『工芸産業振興施策の概要』。

沖縄県中学校技術・家庭科研究会、島尻地区被服領域研究部会

1993年「被服学習を意欲的に取り組ませるための望ましい題材の選定と教具の効果的な活用—手芸品の製作の中でウージー染めを活かした小物作り—」第37回九州地区中学校技術・家庭科教育研究大会、沖縄大会要録：81-84。

開隆堂

2008年中学校『家庭』教科書。

喜屋武なみ子

2004年『授業実践報告に見る沖縄県の地域に根ざした家庭科教育の現状と課題—小・中・高の授業内容に視点をおいて—』琉球大学教育学部家政教育専修、平成16年度卒業研究。

児玉絵里子

2005年『図説・沖縄の染めと織り』河出書房新書。

スティンカム、アマンダ

2002年「ミンサー帯・カガンヌブ—八重山縦縫木綿細帯の全史序説（下）—」『石垣市立八重山博物館紀

要』第19号：1-53。

田中滋・内藤稔

2004年『織の海道・沖縄本島久米島編』織の海道実行委員会。

福原美恵・伊波富久美

2008年「地域に根ざした家庭科授業の課題（第2報）：九州・沖縄における被服実践の検討から」『宮崎大学教育文化学部紀要・教育科学』第19号：121-134。

松本由香・山里充代

2004年「宮古上布の伝統と創造」『国際服飾学会誌』No.26、国際服飾学会：53-67。

真南風の会

2002年『美ら布』日本放送出版協会。

宮古苧麻績み保存会

2007年『苧麻糸物語』。

吉田直人

2002年『図説・琉球の伝統工芸』河出書房新書。

與那嶺一子

2009年『沖縄染織王国へ』新潮社。

＜註＞

1 琉球紺事業協同組合、「琉球紺の歴史」http://ryukyukasuri.com/?@page_id=11

2 琉球新報、「胸元彩るミンサー柄・八重山商工高の制服が一新」<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-1118-storytopic-7.html> (2005.4.9)

3 宮古織物事業協同組合、「宮古上布とは」<http://miyako-joufu.com/history.html>

4 琉球新報、「宮古上布の現状と展望フォーラム」<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-106851-storytopic-86.html> (2001.8.29)

5 琉球新報 2009年5月11日付。

6 中学校へのアンケートでは、回答者の性別、年代を問わなかった。